

131. 理智院所蔵 豊臣秀吉像桔梗桐菊文花唐草蒔絵螺鈿厨子の保存修復

理智院 代表役員 藤永 隆弘

<修復前>



桔梗桐菊文花唐草蒔絵螺鈿厨子

屋蓋 巾 50.8cm 奥行 54.6cm
基台 幅 50.4cm 奥行 50.2cm
総高 62.0cm

大阪府

解説

豊臣秀吉に仕えた戦国大名桑山重晴が理智院法印となった1600年頃に制作されたものと考えられる。

当厨子には桃山から江戸時代初期に国内大流行した「高台寺蒔絵」と螺鈿を採用し輸出漆器として造られた「南蛮漆芸」の二様式が混淆する。これまで両者は別個の様式とされ、一つの器物への共存は知られておらず現在唯一の作例であることから重要かつ貴重な事例であり、美術工芸史的、歴史的な学術的貢献のみならず、地域の歴史見直しや文化振興にも大きく寄与することが期待される。

<修復後>



修復業者

合同会社北村文化財漆工

修復内容

経年によって劣化した漆塗膜と蒔絵の強化、剥落の恐れがある螺鈿の接着補強、木地接合部に生じた亀裂の補修などを主目的とした保存修理事業である。

剥落の恐れがある螺鈿は、膠水溶液を用いて剥落止めを行い、同時に螺鈿表面に付着した汚れを除去した。蒔絵に用いられた銀鈎の苔状に広がった錆化は、クリーニングによって概ね除去することができた。

木地接合部の亀裂には、刻苧漆と漆下地を充填して補強した。

劣化して表面が粉状化した漆塗膜は、希釈した漆を含侵する「漆固め」を行うことで、黒漆と蒔絵鈎の安定化を行った。

全体に蒔絵や螺鈿の文様が見やすくなり、粉状化した漆塗りも落ち着いて全体の状態が安定した。

文化財修理報告書

合同会社北村文化財漆工

代表社員 北村 繁

奈良市富雄元町1丁目 21-1-507

Tel/Fax 0742-51-5279

品名 桔梗桐菊文花唐草蒔絵螺鈿厨子 1基 安土桃山時代

所蔵者 理智院

法量 屋蓋 巾 50.8cm 奥行 54.6cm
基台 幅 50.4cm 奥行 50.2cm
総高 62.0cm

品質形状

木製漆塗り。厨子内部には豊臣秀吉像が安置されている。厨子木地への布着せは確認できない。

下地を施した後に黒漆を塗り、鮑貝の厚貝螺鈿と、絵梨子地、描割り、付描きを用いた金銀平蒔絵による加飾を行う。寄棟造の屋蓋は、軸部は各面に桐菊紋、正面の観音扉に折枝草花唐草文、正面扉左右の脇板には立秋草唐草文、右側面には葡萄唐草文、左側面には瓢箪唐草文がそれぞれ配される。背面は文様を配さず黒漆塗りとする。基壇は上段に各面5つずつ桔梗花文を、下段は各面中央に草文を配す。柱や框は梨子地蒔絵とする。

全体に金銅製の無文の飭金具がとりつけられている。

厨子内面は全面に金箔を貼り、正面扉には伝桑山重治像と伝桂忍像、軸部内面には蓮池図を彩色で表す。

修理前の破損状況

- ・厨子全体にわたって、埃や汚れの付着が著しい。
- ・軸部背面の中央付近には後世修理によって割損部周辺に塗り直しが見られるが、同じ部分で再び木地の亀裂が生じている。
- ・軸部右側面も、中央付近に後世修理の塗り直しが見られ、その上に後補と考えられる葡萄唐草文の蒔絵が施されている。また上部には直径1cmほどの内側まで貫通する穴が開いている。
- ・各所に貼られた螺鈿は、経年劣化によって欠失した部分や剥離が随所にみられる。
- ・銀の平蒔絵は、経年による錆化により黒変し、錆が漆塗膜表面まで広がっている箇所もある。
- ・基台下段の上面は、木地に打ち込まれた鉄釘の錆化により、錆が漆塗膜を押し上げている。
- ・金銅製の飭金具は、汚れの付着と軽度の錆の発生がみられる。
- ・全体にわたって漆塗膜の損傷や浮き上がりが生じている箇所がみられる。
- ・その他、厨子の各所に木地の亀裂などによる損傷がみられる。

修理方針

- ・修理は国指定文化財に対する修理の原則に則り、現状維持を基本とした修理を行うこととする。
- ・漆は良質の日本産漆を、その他の修理材料についても良質な物を選定して使用することとし、伝統的漆工技術をもとに状況に応じて適切な処置を行う。

修理仕様

- ・美術品専用車にて、理智院から奈良国立博物館文化財保存修理所漆工室へ運搬する。
- ・修理前の写真撮影と事前調査を行い、修理計画を確認する。
- ・剥離した漆塗膜や螺鈿は、周辺に小さな短冊状の雁皮紙を濃度の薄いデンプン糊で貼って、損傷が進まないように養生を行う。
- ・剥離した螺鈿は隙間に膠水溶液を用いて本体に接着する。
- ・剥離した漆塗膜は初期工程において膠水溶液を用いて可能な範囲で平滑になるように接着する。
- ・本体全体のクリーニングを行なう。柔らかい毛の筆などを用いて表面の埃を除去した後、精製水などを含ませた綿棒などを用いて可能な範囲で汚れを除去する。
- ・全体の漆塗膜に石油系溶剤で適宜希釈した漆を含侵して漆固めを行い、漆塗膜を強化する。
- ・本体の亀裂が生じた箇所は、生漆を亀裂に含侵したのち刻苧漆などを充填して補強する。
- ・補修を行なった部分は、漆下地で形状を整え、周囲と調和するように仕上げる。
- ・銚金具の欠失した鉸は、銅製の既成釘を加工して補う。
- ・修理後の写真撮影を行い、報告書を作成する。
- ・美術品専用車にて奈良国立博物館文化財保存修理所から理智院に運搬して返却する。

修理工程

- ・美術品専用車にて理智院から奈良国立博物館文化財保存修理所漆工室に搬入した。
- ・デジタルカメラで修理前の写真撮影を行った。(写真1・3・5・7・11・15)
- ・全体の状態を改めて調査し、修理計画を確認した。
- ・基台と軸部は内部の前後に取り付けられた掛け金具によって連結されており、現状のままでは内部に安置されている豊臣秀吉像の取り出しが不可能なため、掛け金具を外して基台と軸部を分離して像を取り出し、施工期間中は別置保存した。
- ・剥離した漆塗膜や螺鈿は、周辺に小さな短冊状の雁皮紙を濃度の低い澱粉糊で貼って損傷が進まないように養生した。(写真9)
- ・毛の短い筆などを用いて表面の埃を除去した後、精製水を含ませた綿棒などを用いて螺鈿や漆塗膜の表面を拭って、可能な範囲でクリーニングした。(写真10・14・18)
- ・螺鈿や漆塗膜の剥落止めを行った。濃度約10%の膠水溶液を螺鈿の剥離部分の隙間から筆で注して内部に浸透させて、可能な範囲で加圧して固定しながら接着した。(写真13)
隙間に注入した膠水溶液が乾燥した後、精製水を含ませた綿棒などを用いて螺鈿や漆塗膜の表面を可能な範囲でクリーニングした。これにより、残存している螺鈿表面の汚れがある程度除去されて、文様が鮮明になった。(写真12・16・19)
膠による剥落止めは、螺鈿の剥離状況に応じて2～4回実施した。
- ・銀蒔絵の錆化によるものと考えられる漆塗膜上の苔状の付着物は、クリーニングによってある程度除去できたため、蒔絵の輪郭が明らかになって蒔絵が見やすくなった。(写真15・16)

- ・全体の漆塗膜を強化するため、全面にわたって漆固めを行った。透漆と生漆を適宜混合して石油系溶剤（オールクリーン J）で希釈した漆を漆塗膜表面に塗布して含侵させた後、漆が乾固をはじめる前に石油系溶剤（リグロイン）を含ませたティッシュペーパー（ケイドライ）や綿棒を用いて塗膜表面に残存しないように拭き取り、常温常湿の状態で乾固させた。（写真 2 0）
漆固めは漆塗膜の状態に応じて 1 ～ 3 回実施した。
- ・クリーニングによって鮮明になった蒔絵は、特に金蒔絵部分の劣化が著しく、蒔絵粉が表面に露出している事により磨滅が進行する恐れがあった。漆固めを行ったことで、蒔絵全体に漆が浸透して蒔絵粉の磨滅が抑えられた。（写真 2 1）
- ・背面や基台などの木地接合部に生じている亀裂は、石油系溶剤で希釈した生漆を亀裂内に含侵した後、刻苧漆を可能な限り充填して補強した。（写真 2 2 ・ 2 7）
- ・基台下段の本体に打たれた釘周辺の漆塗膜が押し上げられた部分は、錆びた釘の表面を空気と遮断して錆化を落ち着かせる目的で、石油系溶剤で希釈した生漆を亀裂から含侵した後、刻苧漆を充填して表面を整えて補強した。（写真 2 3）
- ・屋蓋の棟に打たれた釘周辺の漆塗膜が欠損した部分は、錆びた釘の表面を空気と遮断して錆化を落ち着かせる目的で、石油系溶剤で希釈した生漆を亀裂から含侵した後、刻苧漆を充填して表面を整えて補強した。
- ・螺鈿周辺の漆塗膜が小口で反り上がった状態の部分は、取り扱い時に剥離する恐れがあるため、段差の部分に土手状に漆充填物（麦漆と真菰粉末の混合）を充填して補強した。（写真 2 4）
- ・補修によって新たに充填して補った部分は、色調を調整して周囲と調和するように仕上げた。
- ・屋蓋に取り付けられている鍔金具の折れ曲がった部分は、状態を確認しながら可能な範囲で元の形状に修整した。（写真 2 5 ・ 2 6）
- ・軒先に取り付けられた鍔金具の欠失した鍔 2 本は、銅製の既成釘を加工して頭を漆の焼付けで着色したものを製作して補った。（写真 2 8 ・ 2 9 ・ 3 0）
- ・豊臣秀吉像の烏紗帽に付属する薄い金属製の展角は、片方の付け根辺りが金属疲労により脆弱となっていたため、墨で黒く着色した和紙を背面側から膠で貼って補強した。（写真 3 1 ・ 3 2）
- ・蒔絵に用いられた粉や鍔金具の材質を確認するため、蛍光 X 線分析装置による調査を行った。
(写真 3 3)
- ・デジタルカメラで修理後の写真撮影を行い、報告書を作成した。
- ・美術品専用車にて奈良国立博物館文化財保存修理所漆工室から理智院に運搬し、返却した。

修理における所見

- ・漆塗りは比較的簡素で木地の上に布着せはみられないが、螺鈿の剥離が起点となる周囲の漆塗膜の浮き上がり以外には大きな塗膜の亀裂や剥離剥落はみられない。
- ・目視による観察から、螺鈿に用いられている貝はアワビで、厚みは 0.4～0.5mm ほどである。
螺鈿の形状は桔梗、菊桐文との関連性が全くなく、螺鈿の上に被るように蒔絵の文様が描かれている箇所も随所にみられる。以上のことから、工程としてはまず木地に螺鈿を貼り、貝の厚みに合わせるように下地を施して漆塗りをを行い、塗装面が整ったところで平蒔絵を行って仕上げている。

- ・蛍光X線分析による蒔絵に用いられた金属の同定については、概ね金色を呈している部分は金が主成分、黒色に変化した部分からは銀の比率が高い傾向がみられる。屋蓋の棟や軸部の柱などにみられる赤色地に灰色の斑点がみられる漆塗りについては、今回の蛍光X線分析では金属の同定ができず、使用された材料や技法に不明点が残る。
- ・X線透過撮影により構造を確認したが、全体にわたって釘が打たれているのが確認でき、構造的には十分な強度を保っていることが確認できた。
- ・加飾の様式的には、正面扉の折枝草花唐草文、正面扉左右脇板の立秋草唐草文、右側面の葡萄唐草文、左側面の瓢箪唐草文の表現、あるいは蒔絵文様と関連性のない螺鈿の配置などに、16世紀ごろの南蛮漆器の様相が見てとれる。一方で屋根の桐紋や菊紋にみられる絵梨子地や描割り、針描きといった表現は、高台寺蒔絵の様相がみられ、これらの折衷的な表現様式や屋根の特徴的な形状も相まって、非常に興味深い。



1. 修理前 正面



2. 修理後 正面



3. 修理前 右側面



4. 修理後 右側面



5. 修理前 背面



6. 修理後 背面



7. 修理前 左側面



8. 修理後 左側面



9. 修理中 剥離した螺鈿や漆塗膜の養生



10. 修理中 筆で埃を払っているところ



1 1. 修理前 屋蓋 正面側



1 2. 修理中 螺鈿のクリーニング後



1 3. 修理中 剥離した螺鈿の圧着



1 4. 基台上面のクリーニング前後の様子



1 5. 修理前 軸部左側面



1 6. クリーニング後 軸部左側面



17. クリーニング前 屋蓋 梨子地蒔絵部分



18. クリーニング後 屋蓋 梨子地蒔絵部分



19. 修理中 屋蓋 螺鈿剥落止めが完了した状態



20. 修理中 漆固め 漆を塗布している様子



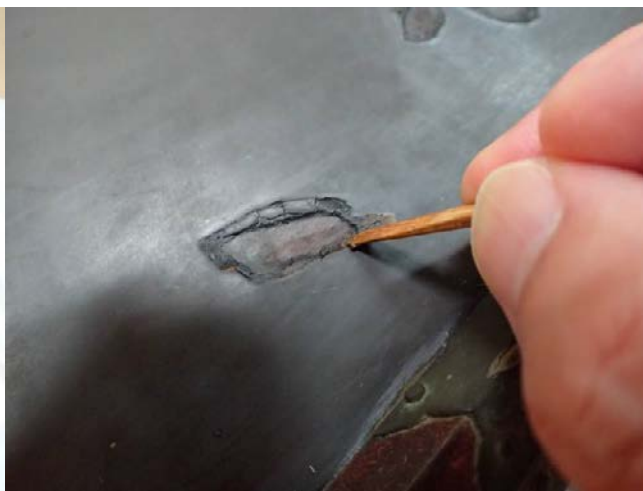
21. 修理中 漆固め（2回目）を完了した状態



22. 修理中 亀裂に刻苧漆を充填している様子



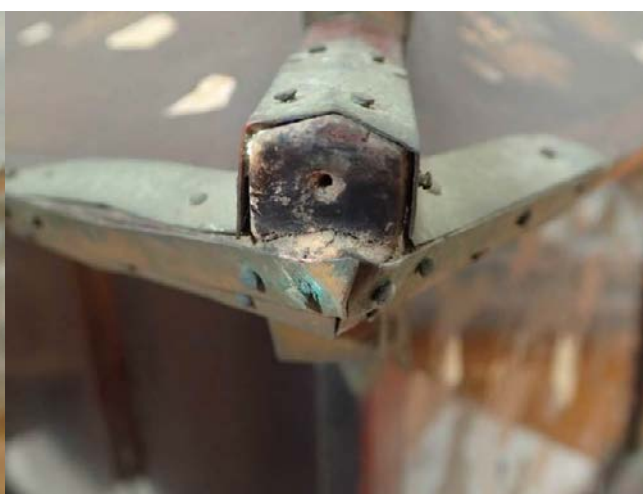
2 3. 修理中 破損部に刻苧漆を充填している様子



2 4. 修理中 漆塗膜の段差を補強している様子



2 5. 屋蓋の鋸金具が折れ曲がった状態



2 6. 屋蓋の鋸金具を修整した状態



2 7. 屋蓋棟の亀裂に刻苧漆を

充填している様子



2 8. 新しく製作した銅釘



29. 修理前 屋蓋 金具の鉋が欠失した状態



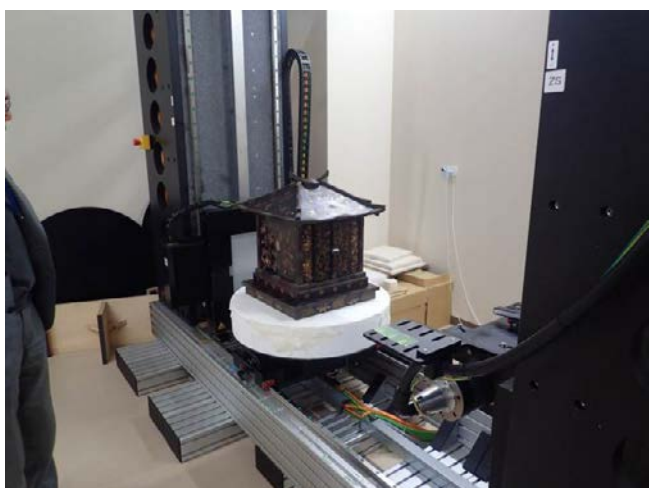
30. 修理後 屋蓋 新調した鉋を打った状態



31. 修理前 豊臣秀吉像の展角（金属の亀裂）



32. 修理後 豊臣秀吉像の展角の補強後



33. X線CTによる透過撮影の調査